# 青い山脈

188号

# せせらぎ 一八八号 目次


ひとりになりたい池井くん　あきつさ　……2

記憶のカケラ　ケイ　……5

お昼の給食　銀平糖　……8

幽霊城の籠り姫　阿野（あの）二枡（にます）　……11

短歌　……23

俳句　……24

受かれメロス　……25

ものがたり　あきつさ　……29

彗星　銀平糖　……33

柳のところの幽霊さん　あきつさ　……38

りぶろ・ういるす　トシ田トシ蔵　……41

# ひとりになりたい池井くん

あきつさ

クラスメイトの池井くんは、少し変わった子だ。

私の右斜め前の席で、いつもイヤホンをしている。授業中は外しているけど、イヤホン難聴のせいか、話しかけられても気が付かないことが多い。

本人に「難聴？」って聞いたら怒られたけど。五回ぐらい話しかけられても気が付かないから、やっぱり難聴だと思うんだけどな。

今も池井くんは授業が終わった途端、黒い、百均で売ってそうなクタクタのイヤホンを耳に押し込んでいる。

「ねえねえ、いつもイヤホンしてるけど、何聴いてんの？」

「……」

「あれ、聞こえてる？」

「……」

「ねえ、無視しないで、……ねえ！！」

「！？　……、何か用？」

何度声をかけても反応がないので、席から身を乗り出してイヤホンを剥ぎ取る。すると池井くんは、背後にきゅうりを置かれた猫みたいに飛び上がるんじゃないかと思うほど肩を揺らして振り向くと、じろっとこちらを睨みつけてきた。

「あ、えと……」

いつもはしつこく話しかけても特に嫌そうな顔はしないのに、今日はずいぶんと機嫌が悪そうだ。池井くんの予想外の圧に負けて、言葉が尻すぼみに消えていく。

「いつもイヤホンしてるから、何か音楽聴いてるのかなって……」

「何も聴いてない。イヤホンに勝手に触らないで。失礼だよ」

池井くんは吐き捨てるようにそう言うと、さっさと教室を出ていってしまった。

それからしばらく時間が経っても、冷たい水を飲み込んだときのように身体の内側が冷えているような気がして動けなかった。

普段ならクラスの男子に凄まれるぐらいで怯むことなんてないのに。今日はなんだか、池井くんが、とても恐ろしく見えた。

そうは言っても人間とは忘れる生き物だ。さらにはまだまだ好奇心旺盛なティーンエイジャーなのだ。三回も寝て起きれば、本気で感じたはずの恐ろしさなんて煙のように消え失せてしまっていた。

「ねえねえ、なんでなにも聴いてないのにイヤホンしてんの？　気持ち悪くならない？」

今日も今日とて私は池井くんにウザ絡みする。

「別に」

「イヤホンしてる理由くらい教えてくれてもよくない？　うちらの仲じゃん」

「ほぼ他人だろ。教えないよ」

「毎日おしゃべりしてるのに」

「君が一方的に話しかけてくるんじゃないか」

池井くんはどこかそわそわと落ち着かない様子で、上の空というか、会話したくないオーラ全開といった様子だ。それでも会話には応じてくれるのだから、だいぶ優しい対応だ。

私が自分の机に上半身を全部預けて突っ伏すと、話が終わったと思ったのか、池井くんは引いていた椅子を戻して前に向き直った。

「……静かにしてろって……。……知らないよ……」
池井くんは小さな声でなにかを呟いているみたいだ。誰かに話しかけているわけではない。周りには誰もいないし。独り言かな。
池井くんは変な子だ。いつも一人で喋っている。
チャイムが鳴って休み時間になると、途端に教室は騒がしくなる。何人かが走って教室から出ていった。
「池井くんさ、いつも誰かに話しかけてるよね」
「……気のせいじゃない？　ただの独り言だよ」
「でも疑問形とか、相手がいる感じで話すよね」
「……そういう独り言なんだよ。あんまり気にしないでほしいな」
「ふーん？」
すうっ、と目を細めながら池井くんが答える。唇の端が上がっているのに、どうにも笑っている印象とはほど遠かった。
この話題は地雷だったかな、気温が下がった気がする。池井くんがじっとこちらを見ているとき、なんだか、もっと恐ろしいものに見つめられているような、そんな落ち着かなさがある。
会話は終了らしくて、池井くんはだるそうにイヤホンを装着していく。せっかく授業終わりに間髪開けずに話しかけてイヤホン装着を阻止していたというのに、つまんない。
「ねーねー！！　一緒に図書館行く約束忘れたー！？」
隣のクラスの友達が、教室中に響くような大声で呼びに来た。彼女はまだ一人で図書室に行くのは恥ずかしいとか、イマイチよくわからない恥じらいを持っているせいで、毎回私を呼びに来る。
「ごめん忘れてた、今行くーー！！」
慌てて机の上の教科書を机の中に放り込んで椅子から立ち上がると、椅子の脚が左足に引っかかってガタン！！　と大きな音を立てた。
背後で鳴った、空気のこすれる音は聞こえなかった。
オレンジ色に照らされている廊下をドタドタと一人大騒ぎしながら走る。
「ああーー電車十七分後ぉ！　走ればいける！！」
電車が出るまでかなりギリギリな時間なのにも関わらず教室にランチボックスを置き忘れたことに気づき絶望した二分前。来た道を引き返し教室まで走る。流石に放課後になってからそれなりに経っているため廊下に人影はない。
「わあーー！　セーーッフッッッ！！」
ガラガラと音を立てる教室のドアを叩きつけるように勢いよく開けた。
「あ」
「えっ？」
誰も居ないと思っていた教室には池井くんがいた。右耳だけイヤホンをしている。
教室の大きい窓からは傾ききった夕陽が入り込んで、池井くんの姿が逆光で照らされる。
イヤホンをしていない方の耳。左耳から、何かが。
ナニかが、私を、こちらを見てる。
こちらを、見ている。
「……どうしたの」
「っ、あ、……お弁当バッグ忘れちゃって……」
影になっていて池井くんの表情は見えない。
「へえ、そうなんだ。ああ、これ？」
池井くんが小さな手提げをこちらに差し出してくる。それを受け取る私

の指先が小刻みに震えているのが目に入る。
変な声で叫んでいたのを聞かれたことなんて吹っ飛ぶくらいの、そんな緊張感が脳を支配していた。
逃げ出したいと思うほど恐ろしいと思っているのに、なぜか池井くんの左耳から目が離せない。
そこにはなにもいないのに、ナニかがいる。いる。見てる。こっちを見てる。
「あ、りがとう……さよなら、バイバイまた明日ね！！」
池井くんの手からひったくるように保冷バッグを受け取ると、背を向けて弾かれたように走り出す。
もう一秒だってあの空間に耐えられそうになかった。

「縺ゅ?縺ゅ????£繧峨1縺。繧?▲縺溘?縺」
「……だから出てくるなって言ったのに。怖がられちゃったじゃん」
「縺薙ｓ縺ｫ縺ｾ鷺「逋ｽ縺昴ﾊ縺ｫ縺ｭ縺ｾ繆§§ｺ矩??☆縺ｫ繧薙※縺ゅ;蠕励→縺?ｈ繆ゅ→繧薙?縺溘ａ縺ｾ蟒帙↓譽ｽ繧薙〒縺?ｋ縺ｾ諤昴▲縺ｺ縺?ｋ繧薙□縺?ｼ」
「うるさいよ。僕としては君に早く出て行ってもらいたいんだけど」
「蜀ｩ縺溘＞縺薙→險?縺?→縺√?√Ｐ繧薙ｓ縺ｫ縺ｾ」
ぎゅ。と、耳の中のソレが、それ以上の言葉を紡ぐ前にイヤホンを耳に押し込んで黙らせる。別にイヤホンをすることで喋れなくなるわけじゃないらしいが、僕の意を汲んで黙ってくれる。変なところで物わかりのいい異形だ。
僕の左耳には異形が棲んでいる。姿は僕も見たことがない。気がついたときには僕の中に棲んでいて、やたらと僕に話しかけてくるようになっていた。
姿は見えず声だけ、それも声は聞こえているのに内容だけが頭に流れてくるような変な感覚だったので。僕もはじめは幻聴を疑った。
しかし、いるのだ。ときどき僕の左耳のあたりを見て、異様なほど怯えた顔をする人たちが。
「せっかく僕にも話しかけてくれるような子だったのに」
異形が四六時中話しかけてくるのに相手をしてしまうせいで、僕はクラスでかなり遠巻きにされている。流石にそれに気付けないほど僕も鈍感ではなかった。
非難の気持ちを込めて声に出してみても、異形はうんともすんとも言わない。都合のいいときだけだんまりだ。
「はあ、」
ため息をつきながらも持ち帰り忘れていたプリント類をカバンにしまい、教室を出る。
「そろそろ、一人の時間が欲しいんだけど」
耳の奥で、耳障りな笑い声が聞こえた。

# 記憶のカケラ

ケイ

「…なんだっけ、これ」
冷蔵庫をのぞき込みながら、呟いた。
目線の先にある袋を取り出し、確認すると、それはブランデーケーキだった。
「…私が買ったのかな。」
まあ、それしかないか。
袋に書かれた賞味期限は三、四日前のもの。
少しだけ考え、戸棚から皿とフォークを取り出す。
「冷蔵庫に入れてあったし…」
言い訳じみた独り言をつぶやきながら、皿の上にケーキを出す。
幸い、あまりたくさんは残っていなかったので、食べてしまうことにした。
薄暗いままのキッチンから、日の光の差し込むリビングへ。
何となく、ぼーっと壁の貼り紙を眺めていた。
私の家の壁には、ほぼすべての部屋に貼り紙がしてある。
過去の私から未来の私への手紙。

私は記憶に障害があり、あまり長く記憶がもたない上に、覚えていることも忘れていってしまう。
一度にすべてを忘れてしまうわけではなく、一部が消えるだけ。
それでも、一度忘れてしまうと、戻ってはこない。

少しずつ、少しずつ、空っぽになって何も思い出せなくなるまで。
自分が誰かもわからなくなるまで、記憶は消え続けるという。
私のかかった病気の、症状の一つだとわかったのは、いつだったか。
何年か前だったとは思うが、やっぱりもう思い出せない。
自分の残りの命すらも覚えていられない。

ケーキを口に運ぶ。
ブランデーの香りがふわりと漂った。
「…」
そういえば、母はブランデーケーキが好きだと言っていたかもしれない。
思い出せないはずの母の顔を、頭の中で必死に形作る。
どんな顔だっただろう。
どんな声で、どんな笑い方で、何が好きで。
…どんな、人だっただろう。
もう思い出せないものを思い出そうとすると、いつも苦しくなる。
思い出したいのに、思い出せない。
忘れることを恐れるのとはまた違う。
心の中がもやもやするような、わけもわからずに泣きたくなるような…。
すこしばかり寂しいのかもしれない。

もそもそとケーキを口に運びながら、時計に目をやった。
そろそろ娘が帰ってくるころだろうか。

少しした頃。
「ただいまーっ!!」

飛び跳ねるような元気な声がして、娘の結菜がリビングに飛び込んできた。
「ただいま、お母さん。今日は調子がいいの？」
無邪気に尋ねる結菜から、無意識のうちにわずかに目を逸らしながら答えた。
「…うん。」
「よかったぁ！最近お母さん寝てばっかりだから、ちょっと心配しちゃった。」
「…」
ちゃんと答えることができなかった。
決して調子がいいとは言えなかった。
数日寝込んでいて、やっと回復して起き上がれるようになったくらい。
調子がいいのかと言われれば、まだ悪いまま。
幼い結菜を心配させたり、不安にさせたりしたくなくて、少し嘘をついてしまっている。
「手を洗って、荷物を置いといで。」
半ばごまかすように話を逸らした。

手を洗い、学校の荷物を片付けてきた結菜が、私が食べているケーキを指して言った。
「お母さんが食べてるそれ、なに？」
「…これはね、お母さんのそのまたお母さん、つまり結菜のおばあちゃんが好きだったケーキなの。」
「なんて言うの？」
「…ブランデーケーキ。」
「私も食べたい！　食べてもいい？」
「…少しだけね。お酒が入ってるから。」
「お酒？」
「うん。あまり強いものではないようだけど、子供にお酒はだめだからね。」
「なのに食べてもいいの？」
「日本の法律では二十歳未満の飲酒は禁止されている、って話は前にしたよね。」
「うん。」
「ここでは飲料としてのお酒、つまり液体の、よく見るお酒は飲んじゃいけないよ、ってことなんだけど。」
「うん。」
「ケーキは飲料ではないから、法律上は問題ないってことになってるの。でも、おすすめされるものではないし、たくさん食べると悪い影響があるかもしれない。だから、少しだけ、ね。」
「わかった！」
「…結菜が大きくなって、お酒を飲めるようになったら、また食べてごらん。お酒の味を知って、今よりもおいしく感じるかもね。」
「そうなの？」
「味を知ると、おいしく感じるようになったりするんだって。もしかしたら、今よりおいしく感じるかもね。」
「じゃあ、大きくなってからお母さんと一緒に食べたら一番おいしいね。」
「？」
「結菜は、お母さんと食べるのが一番いいの。一人だと食べられなくても、お母さんがいたら食べられるようになるし、お母さんがいたら…一人で食べるよりもっとおいしいんだもん。」
「…っ」

涙が出てきそうになった。
この子を置いていきたくない。
きっとかなわない。
叶わないだろうと思っても、それでも願ってしまうだろう。
「おばあちゃんの話、もっと聞かせて！　どんな人だったの？　お母さんに似てる？」
「…」
楽しそうに瞳を輝かせながら尋ねてくる結菜を、見つめる。
頬が緩んだのを感じた。
「いいよ。思い出せること全部、教えてあげる。」
私が忘れてしまっても、どうか覚えていてほしい。
欠片でもいい。

「お母さん？」
結菜が不安そうにこちらを覗き込んでいた。
「どうしたの？」
「お母さん、元気ない？　私わがまま言った？」
「…そんなことないよ。大丈夫。」
心配してくれてありがとう。そう言うと結菜は安心したようだった。

結菜を見つめながら、考えた。
この子が一人でも生きていけるようになるまでは、生きていなくては。
絶対に生きてやるんだ。

病は気から、じゃないけど、絶対生きると決めた方が人間、長生きするものだから。
また知らないうちに頬が緩んでいたらしい。
そんな私を、結菜が不思議そうに見つめていた。

# お昼の給食

銀平糖

「今日の給食なんだろー。えっと……よっしゃー！今日の給食『ココア揚げパン』じゃん。余ったら絶対じゃんけん参加しよー」

「え、にーちゃん今、『ココア揚げパン』って言った？やったー。俺も絶対お替りしてやるぞー！」

「ほら、喋ってないで早く準備しなさい。遅れるわよ」

登校班の集合時間が差し迫っているのを見て、幸子は言った。幸子は二人の息子をもつ主婦である。上の息子は日向、小学５年生。下の息子は晴、小学３年生だ。

『いってきまーす』

二人の息子がロケットみたいに家を出たあと、幸子は掃除を始めた。ガーガーと掃除機をかけながら、幸子はふと、さっきの息子たちの会話を思い返した。

「給食か……懐かしいなぁ」

記憶を辿り、昔食べた給食を思い出していく。３０年以上前に食べていた給食。美味しかったのは覚えている。日向と晴が通う学校の給食は給食センターで作られて、そして運ばれてくる。だが、幸子が通っていた小学校には学校内に給食室があってそこで給食が作られていた。４時間目の終わりぐらいになると、給食室からいい匂いがして、あと１０分で給食だ、と思いながら、幸子はお腹が鳴るのを腹筋を使って堪えていた。今のお腹は昔よりぷよぷよしているのは、腹筋を使っていないからだと納得する。給食のおばちゃんたちが一生懸命作ってくれた出来立ての給食はとても、とても美味しかった。

具体的なメニューを考えていると、まず一番に思い浮かんだのは息子たちが話していた揚げパンだ。幸子が食べていたものは、お盆に収まるか収まらないかくらいの大きめの揚げたコッペパンにきなこがまぶされていた。あの、甘いきなこと油が混じった少しジャリジャリした感じがたまらなく美味しかったと鮮明に思い出される。

牛乳も家で飲むときに比べて格段に美味しかった。冬になると、みんな牛乳瓶をヒーターの上に置いてあたためていたものだった。誰のものか分からなくならないように牛乳瓶の紙の蓋のところに「さちこ」といった感じで、名前をきちんと書いていたのだが、そこにふざけて変顔を書いている人もいた。

ぐー

（お腹すいたなぁ）家事をやっていたら、もう１１時半をまわっていた。そろそろ、昼ご飯を作り始める時間である。

（あ、そうだ！今日の昼ご飯には懐かしの給食を再現してみよう。すごくいいアイデアだ。メニュー、じゃなくて「献立」はどうしようか。久しぶりに若鳥のマリネが食べたい。汁物には大好きだったふわふわの卵のイタリアンスープを。副菜にはサラダの中一，二を争うくらい美味しかった小松菜サラダから作ろう。後はシンプルに白ご飯。なぜかイタリアンスープだけ洋風、という献立としては微妙だが、好きなものを詰め込んだ幸せの献立であるから、気にしない。これで決まりだ。早速作っていこう！）

ワクワクしながら、台所に立つ。最初にご飯だけ炊いておく。一人分だから、１合だけ炊く。次に小松菜サラダを作っていく。小松菜とキャベツをゆでて２センチくらいの大きさに切る。キュウリは薄切り。そこにツナ缶を入れた

後、醤油や酢、コショウなんかの調味料を混ぜて……（うーんちょっと違うか）何回も味見をして、試行錯誤をする。

「よしできた。」

一品目、小松菜サラダの完成だ。食べるまで冷蔵庫に入れておこう。

次はイタリアンスープ。キャベツ、玉ねぎ、にんじん、ウインナー、ジャガイモを同じくらいの大きさに切っていく。

トントントントン

シャッシャッ

ザクザク

（うぅ、玉ねぎで目が痛い。）ちょっと苦戦しながらも、野菜をなんとか切り終えた。鍋にお湯を沸かし、グラグラと煮ていく。きっと、十五分くらいで火が通るであろう。タイマーは１５：００にセットする。その間に若鳥のマリネをする。鶏もも肉を一口大に切って、下味をつける。後から、マリネにするから、下味はいつもの唐揚げよりは薄め。鶏肉は菌があることも多いのでよく手を洗ってから、マリネ液も作っていく。ニンジン、玉ねぎ、ピーマンを千切りにして、火を通す。鍋で煮てもいいのだが、ここは、手軽にレンジでチン。それを、いつも作っている一般的なマリネの調味料に漬けておく。

ピピピピ　ピピピピ

丁度、マリネ液を作り終えたタイミングでタイマーがなった。イタリアンスープの鍋の蓋を開けると、ぶわっと湯気があがった。メガネが真っ白だ。火が通っていることを確かめるために、竹串をニンジンに刺すと、スッと通った。ちょうどよい煮え具合である。火を弱めて、コンソメなどで味をつけていく。そこに溶き卵を入れるのだが、ここがポイントである。溶き卵に牛乳とパン粉を入れるのだ。これをすることにより、卵がふわふわになる。と、幸子はネットで見た。最近はレシピを知らなくても、料理を作れてしまう非常に便利な世である。卵液をゆっくりとスープに回し入れて、少ししたら火を消す。

「うん、いい感じなんじゃない？」

卵はとてもふわっふわにできた。美味しそうだ、早く食べたい、さっさと若鳥のマリネも作ってしまおう、そう思い、油を温めて、さっき下準備した鶏肉に片栗粉をまぶし、揚げていく。いつも揚げ物を作るときは四人分で、しかも、食べ盛りの男子が二人含まれるので、ものすごい時間がかかる。だが、今日は一人前。非常に楽である。鶏肉が揚がったら油を切り、皿に盛ってマリネ液をかける。冷蔵庫で冷やしておいた小松菜サラダは小鉢にいれて、イタリアンスープはお椀に注ぐ。最後に炊き立てご飯をよそって……

「よし、完成――！」

お盆に載せたごはん達が、ホカホカと湯気を立ち上らせる。これは、かなり給食の再現度は高いんじゃない？と幸子は思う。とても美味しそうにできたのである。

「いただきます」

まずはイタリアンスープを一口。――。（うっまー！！）ふわふわ卵と野菜の甘みがマッチしている。イタリアンレストランに出せるほどの絶品だ。言っておきながら、給食みたいなイタリアンスープがイタリアにあるのかは知らない。

次は、小松菜サラダだ。――。（んーこれも美味しい！）ツナと小松菜の相性がすごくいい。普段、小松菜はお浸しなどにしがちだが、この色んな野菜が入ったサラダにするのもこんなに美味しかったのだと気づく。新たな発見だ。

一番最後に箸を伸ばした先は、メインの、若鶏のマリネ。

サクッ
ジュワッ
シャキシャキ
「ん、ん、んーんー」
（美味しい、美味しい、美味しすぎる。え、えぇ、こんなに美味しかったけ）
ご飯を掻き込む。幸せである。定番の唐揚げと間違えのない南蛮味、そのコラボレーションは美味しさの相乗効果をもたらす。さらにこの野菜達もいい仕事をしてくれたのである。（はぁ～幸せ～）

「ごちそうさまでした」
美味しい昼ご飯が楽しめた今日は、幸せな一日である。「この幸せをもっと幸せにするために、残った家事もさっさと終わらしてしまおう」そう思い幸子は掃除機にスイッチを入れた。

# 幽霊城の籠り姫

阿野二枡

私はあの日、夏休みの終わり頃で、母の実家に来ていた。せっかくだから近所を探検してみよう、そんな無邪気な好奇心で、今まで行ったことのない北側の道をどんどん進み……。これはある夏のひと月の思い出だ。

## 一・幽霊城へのご招待

祖母の家を出て、日の当たらない北側の道に入って、ずっと真っ直ぐ歩いていく。閑静な住宅街は、この道にいるときだけは少し涼しくて、これほど夏にはありがたい空間があるのかと驚いた。――またこの家に来たときにも、必ず散歩しよう。ああでも、秋になったらもう寒すぎて無理かしら。なんだったら、今回の一週間の滞在中は、毎日来てもいいな……。そんなとりとめもないことを考えながら、特に行く当てもなく道に従って進んでいた。

――エミリーさま。

え？

――エミリー・スペンサーさま。

誰かが呼んでいる？

――聞こえますか、ミス・エミリー・スペンサー！

「はっ、はいっ！」

得体の知れない女性の声に怒鳴られて、私はどちらを向けばいいのかも判らずに咄嗟に叫んだ。

――聞こえているならよろしいのです。そのまま真っ直ぐお進みください。

……声の通りに進んでしまっていいのかしら。そう思わなかったわけではないが、「怖い」「犯罪に巻き込まれるかも」といった常識的な不安より、「冒険が始まるわ！」という昂奮が勝ってしまったのである。

そうして声の誘導の通りに真っ直ぐ歩き続け、暗い森に入っても足を止めずに進んでいると、傷んだ古城が視界に飛び込んできた。一部の窓の硝子は割れ、壁を蔦が――そういう意匠ではなく、長い年月を経て覆ってしまったように見える――這い上がり、正面玄関へ上がる石段は苔で足を滑らせないようにするのが大変だった。

――案内はここまでです。どうぞ、お進みください……。

声は強くなってきた風に掻き消されるようにして聞こえなくなった。ひとまず正面にどんと構えている玄関扉のノッカーを叩く。

「お邪魔します……」

返事はなかったが、謎の声がここまで導いてきたのだから、不法侵入にはあたらない。……と思いたい。

『ねぇ、あれって』

『お嬢さまの……』

『ついに、かしら』

玄関ホールの奥からひそひそと話し声が聞こえてくる。無人ではないらしい。

「あのう」
『はーいはいはい！　いらっしゃいませ！』
『ちょっとハンナ姉さん、落ち着いてください』
「っっっっっ⁉」
　私は呼吸も忘れて現れた二人を凝視してしまった。失神しなかっただけ偉いと思う。だって二人は、上等そうなメイド服を纏った骸骨だったのだ！　ハンナ姉さん、と呼ばれた人（……？）の声は、これまで案内してくれていた声と同じだった。
『コホン、失礼。……エミリーさまですね、お待ちしておりました！　わたくしどもはこの城に勤めておりますハンナと』
『リ、リリーです。ではわたくしはこれで……』
　リリーと名乗った骸骨はすっといなくなってしまった。
『あの子は昔からああなんですの、お気になさらず。さっ、旦那さまがお待ちかねですよ、応接間に向かいましょうっ』
「え」
　驚く間もなく、私はハンナさんに腕を引かれて廊下を奥へ奥へと進んでいた。手が触れたら死ぬようなゾンビではあるまいか、と思っていたのは杞憂に終わった。優雅に揺れる濃紺のスカートから覗く骨だけの脚は妙にちぐはぐな印象を与える。
『ハンナでございます』
『ああ、鍵は開いている』
『失礼いたします』
　ハンナさんが扉を開け、私は立派な応接間に通された。廊下の壁紙がぼろぼろに破けているのがいかにも幽霊城、という感じだが、壁紙自体は上品なクリーム色の地に草花が描かれた高級感あるもので、きちんと修理と掃除をすればさぞ立派になるだろうな、と思った。応接間の扉も同様、剣で刺したような大きな傷が気になったが、在りし日は溜息が出るほど美しかったに違いない。その奥からは王様が出てきたって驚かない、と感じられるほど重厚なマホガニーの扉だ。
　その両開きの扉が開くと、奥のソファにはモーニング姿の骸骨が腰掛けていた。服装は確かに「旦那さま」の雰囲気だが、いかんせん中身が骸骨だもの、違和感に目が慣れない。
『ようこそ。話はハンナたちから聞いているだろうか』
「はじめまして、ええと……」
『エドワード・グレンヴィルだ。その様子では何も話していないのか』
「グレンヴィルさん……さま？　私はエミリー・スペンサーと申します。はい、玄関に上がらせていただいてから一番にこちらに案内されましたので……」
『ハンナ』
　窘（たしな）める声は少しも怒っていなそうだった。思っていたより若々しい声……三十代半ばか、四十代か、というところだろうか。
『申し訳ございません、旦那さま。いよいよお嬢さまの救世主がいらしたと思うとこのわたくし、居ても立ってもいられずつい』
『君は昔からそうだったな……本当に、昨日のことのように思い出されるよ。まだ子どもだった君が中庭ではしゃいで転んで――』
『あーー！　お願いですお客さまの前でそんなっ』

『おっと、すまない。で、エミリー嬢』
彼は視線（？）をこちらに向けた。骸骨が頭を回すさまは怖いというより珍妙だ。
『私たちの姿が見えるという特別な君に、折り入って頼みがある』
「はい、何でしょう」
『どうかソフィアの……我が娘の友人……話し相手になってくれないだろうか。無理にとは言わない。一ヶ月経てば何事もなく解放して差し上げると約束しよう』
「娘さんの」
『ああ。詳しいことは追って説明しよう。とにかく娘を救うには君の助けが必要なのだ』
「はあ……よく解りませんが、解りました」
――どっちなんだ、私よ。
『感謝する！』
骸骨は立ち上がり、私の両手を握るとぶんぶんと何度も振った。その手は当然骨なのに、不思議と温かいような気がした。
『ハンナ』
『はいっ』
『彼女をソフィアの部屋まで案内してくれ』
『もちろんでございます！』

二．お嬢さまは人見知り

ハンナさんはそれはもう嬉しそうに私の手を引きながら階段を上っていった。私はまだ状況を半分も理解していない。
『こちらがお嬢さまのお部屋になります。リリーよりも人見知りが激しいお方ですが、お気を悪くなさらないでくださいまし。根はとっても優しいんですの、恥ずかしがりなだけで』
息継ぎもせずに云うと、ハンナさんは部屋の扉――こちらも応接間のそれには及ばないが、高級感溢れるマホガニー製だ――を三度叩いた。
『お嬢さま、ハンナでございます』
『……もう一人、いるわね』
部屋の主は冷たい声でそう返し、入室の許可を与えなかった。子どもの声だ。十六の私よりは年下、だと思われる。
『はい、お嬢さまの話し相手にと旦那さまが。ご存命の方です。どうぞこの方にご挨拶させてくださいませ』
『そういうの、いいから。わたしにはハンナもリリーもお父さまもいるもの、外の人なんて』
『ですが……』
『だいたい、生きた人間がわたしたちのことを気味悪がらずにいられるわけ？　無理があるわよ、その人が可哀想だわ』
「そんなことはないわ」
気づけば声が出ていた。
『……』
「気味が悪いとは思わない。最初は、そりゃあ……びっくりはしたけれど、気味悪がってはいないわ。そうだったらとっくに這ってでも逃げた」

『……変な人』
声が少しだけ柔らかくなる。それから衣擦れの音がして、
『開けても、いいわよ』
そう云っておきながら、ハンナさんが把手に手を置くより先に内側に向かって扉が開いた。彼女が歩いてきて、自ら開けたのだ。リリーさんよりもひどい人見知りと聞いていたが、そんなことはないのでは 。
顔を出したのは薄い桃色のドレスを纏った骸骨だった。背は私より少々低く、こちらを見上げてくる頭蓋骨を撫でたい衝動にかられ、耐えた。相手は骨なのに、可愛らしいと思ってしまった……。
『あなたが父の命令でわたしの友だちになってくれる方ね』
「命令、ではないけれど、そういうことです」
『わたしはソフィア・グレンヴィル。十二よ』
「エミリー・スペンサー、十六歳です」
『あなたのほうが年上なのだし、丁寧な言葉遣いは要らないわ』
「解りました……ええと、解ったわ？」
なんというか、彼女からは可愛らしさと同時に、これぞ貴族といった威厳も感じられるのだ。
『これでいいでしょう、ハンナ』
『自己紹介としては及第点ですわね』
『ならもういいかしら』
こちらの答えを待たず、扉は非情にも再び閉ざされてしまった。廊下に閉め出された私たちは困り顔で――いまいち骸骨の表情はよく判らないけれど――お互いを見やり、苦笑するしかなかった。この様子では、一ヶ月で友人になるというのは前途多難に違いない。

三．もう一週間か、まだ一週間か

結局、肝心のソフィアとは大した進展もなく、一週間が過ぎていってしまった。他の使用人の皆さん（全員が服を着た骸骨である）とはそれなりに打ち解け、お城のこともいくらか教えてもらったが。
まず、エドワード・グレンヴィル氏はつくづく家族運に恵まれない伯爵だということ。初めに生まれた跡取り息子は生後半年で病死、次にソフィアが生まれたが、難産のために奥方が身罷ってしまったそうだ。そのとき自身は二十四歳、奥方はまだ二十二歳だったという。
それから、今いる骸骨たちは皆同じ日に亡くなったそうだ。死因については語りたくなさそうだったので、こちらも下手な深追いはしなかった。
ここにいる使用人は四人で、ハンナさんとリリーさん、執事のトマさん、厩番のアルさん父子（おやこ）だ。呼び捨てで構わないと云われたが、私が慣れないので勝手にさん付けしている。ちなみに、トマさんの奥さんは自分が三歳のときに家を出てしまい、代わりに伯爵夫人が実の息子のごとく可愛がってくれた、とアルさんが語っていた。
ソフィアについては、「話し相手といってもなかなか難しいでしょうから、エミリーさまが心配なさるようなことはございません」とのことだったが、それでは私がここに来た意味がないではないか。
食事は毎日三食出る。正直に言えば、この一週間で随分と胃袋を掴ま

れてしまった。一ヶ月の期限が終わっても、ご飯のためだけにまた来たいと思うほどだ。そう伝えると料理担当のリリーさんは頬骨を染めて(⁉)蚊の鳴くような声で『ありがとうございます、励みになります』と答えるとまたどこかへ走って消えてしまった。

本丸(ソフィアの部屋の扉)は初日以来生きた蛤のごとく閉ざされているが、伯爵から『早く距離を縮めろ』とせっつかれているならまだしも、下手に突撃して完全に信用を失うくらいなら、と近付かないようにしていた。まだ入れなさそうです、と申し訳なさそうに毎日報告してくるハンナさんに、かえってこちらが悪いことをしているような気分になる。それで、私のほうから、「今日で一週間の節目でもあるし、もう彼女が出てくるまでそっとしてあげましょう」と提案しておいた。腫れ物に触るような態度は無礼かと悩んだが、望まぬ接触こそ内気なソフィアには苦痛だろう、と思ってのことだ。

今のところはソフィア以外の人との人間関係は概ね上手くいっている、ような気がする。伯爵は、本人は陰鬱な雰囲気を纏っているが、事ある毎に軽い冗談を飛ばして私たちの笑いを取ることが好きな人でもあった。それと、彼は貴族とは思えないほど家族想いの人だ。ソフィアの部屋を訪れ、入っていく前より満ち足りた様子で書斎に戻ってきて、奥方の写真に向かって『さっきソフィアがね――』と報告するのが日課だということはこの一週間で判ったことのひとつだ。……というと、私が厚かましくも城の主人の書斎に勝手に出入りする人間のようだから、書斎へ戻ってからのくだりはトマさんに聞いたことだと付け加えておく。姿の見えない声に冒険だと心躍らせるような人間でも、それくらいはわきまえている。

「あと三週間とちょっとか……」

宛がわれた客室には、私以外誰もいない。窓硝子は割れてこそいないものの、蔦がびっしり張り巡らされているために外は緑一色だ。食事はここにハンナさんが運んできてくれて、掃除は自分でやったりリリーさんがやってくれたり。外装や廊下のように荒れ果てているものだと思っていたから、この好待遇はありがたい。与えられた仕事――ソフィアと友人関係を築くこと――はちっとも進んでいないのに、これではただの迷惑な居候だ……。

## 四．友人とは、と訊かれましても

十日目、だったと思う。私は、目覚めるなり視界に飛び込んでくる補修されたバーガンディーの天蓋にも慣れてしまいつつあることを自覚しながら、眠い目を擦ってベッドから降りた。光はほとんど入ってこないが、朝のけじめとして窓のカーテンを全開にする。この城はどこにも暦を置いていないから、来てから一週間までは憶えていられたが、もう今日が何日なのか判らなくなった。

朝の身支度を人に任せるなんて、幼児の頃以来だ。伯爵はいつかソフィアに着せるために仕立てたというドレスを快く貸してくださったが、自分では着られないからハンナさんに頼り切りになってしまう。慣れないが、それが彼らが生きていた時代の常識なのだ。それと、コルセットがあまりにもきつくて、四六時中吐き気と闘う羽目になった。ほうぼう

の小説にある、貴族の女性が失神する描写が身に沁みて理解できる。これで倒れないほうがおかしい！

支度をしてくれたハンナさんと別れて客室を出、階段へ向かうところで、リリーさんと出会った。

『おはようございますエミリーさま……』

「おはようございます、リリーさん。ソフィアさんはもう起きました？」

『ちょうどお支度が終わったところです』

彼女がそそくさと逃げていこうとするので、

「待って！」

『……はい』

「彼女は元気にしてます？　……その、私がいるせいで落ち着かない、とかは」

『普段通りにお過ごしです。……そういえば、お嬢さまからエミリーさまに伝言が』

「そうなんですか」

『午後の三時に、お嬢さまのお部屋にいらしてください』

「はい⁉」

『では失礼いたします』

骸骨はふっと消えた。走って行ったのではなく、その場で文字通り霧散してしまったように見えた。……本当に幽霊なんだ、と莫迦げた呟きが口から漏れた。

それから三時まではコルセットの圧迫に加えて伝言の内容がずしんと胃に来て、碌にお昼も食べられず客室の中を右往左往するばかりだった。

三時になり、私は意を決して客室の扉を開けた。心なしか廊下のほうが一段と涼しい、を通り越して、寒い。

ソフィアの部屋へと向かう道は、実際の長さ以上にいたく長く感じられた。所々斬られ、破れた壁紙が、無駄に恐怖心を煽ってくる中、ソフィアの部屋の前に辿り着いた。

――こんこん。

『どなた』

「エミリーです」

『どうぞ』

声からは何の温度も感じられなかった。衣擦れの音は聞こえてこず、自分で開けて入れということなのだと了解する。マホガニーの扉に嵌(は)まった金属の把手(とって)は、私の指の温度を素早く奪った。――夏なのに。

前回はよく見えなかった部屋の中は、全体的に可愛らしい花模様で統一されている。初日とは違った桃色のドレスの肩口には立体的な花柄の刺繍が施され、その華やかさと下に見える鎖骨が……恐ろしいほどよく似合っている。この十日（たぶん）で服を着た骸骨を見慣れたからではなく、きっと初めて見たのが彼女の今の姿だったとしても自然に「きれい」と云ってしまっていたのだろう。そう、今のように。

『きれい？　わたしが？　あなた目が腐っているんじゃないの』

「ごめんなさい」

『謝ってほしいわけじゃないわ。ただ、わたしにそんなことを云うのはここに住んでいる皆以外はあなたくらいのものでしょうね」

「そう、かしら」
私が次の言葉を探していると、机に向かっていたソフィアは本を伏せて立ち上がり、こちらへ一歩一歩近づいてきた。
『わたし、社交界デビューで友人づきあいを始める前に死んだの。ハンナとリリーとは、仲よくなりたくても決して対等に接することはできないし。だから、正直に云えばどうやってあなたと関わったらいいか解らないわ』
私の反応には構わず、というより、私のほうは決して見ないように努めている様子で、彼女は息継ぎもせずそう云った。「人見知り」と「独り言が饒舌」は両立する。そしてそれは私の性格によく似ている。ともすれば、上手く行くかもしれない。
「……」
『わたし自身が望んだことではないとは云え、母を殺した人間であるのは事実でしょう。そんなわたしと、誰が関わりたいのよ。ねえ、エミリー、あなたは父に脅されているんでしょう？』
「いいえ、私は望んでここに……」
『それはわたしが呼び出したからで、拒否できなかったから』
「呼び出した？　リリーさんにあなたの様子を訊かなければ出てこなかった伝言よ」
ソフィアは下顎をがくんと落としてこちらを向いた。――あまり勢いがいいので外れるかと思った。
『そ、そう。……本当に、信じていいのね？　わたしには、伯爵の娘という立場がある。そのために気づかないうちに、他の人に嫌な思いをさせながら、色々なことをしてもらっていたと思うわ。だから、相手の意思かどうか確認できないことを無理強いするのが一番嫌いなの。どうか教えて』
「間違いなく、私の意思、です」
『じゃあ、友だち、とは何かしら』
これには意表を突かれた。しばらくのお見合い状態ののち、
「どうでもいいことを云い合えて、離れていてもお互いのことを忘れない人、ではないかと」
『どうでもいいこと？』
「アイスの蓋を開けたらハート模様だった、とか、満月でも半月でも三日月でもないけれど、今夜の月は綺麗だね、とか」
『そんな些末なことを人に云っていいの？』
「いいんじゃないかしら、変に重く考えるよりは」
『じゃあ、わたしから、いい？』
ソフィアはぐっと拳を握って私と目を合わせた。これは大きな進歩だ。
「もちろん」
『昨日も今日も、そこの蔦に蝶が止まっていて、わたしがその絵を描こうとスケッチブックを探している間にいなくなってしまったわ』
「それは残念」
『ふっ、うふっ』
笑い声を押し殺す骸骨、ソフィアでなかったらかなり怖い。
「私何かおかしなことを云った？」
『違うの、こんな……どうでもいいことを、云えるんだと思ったら、嬉

しくて。ほら、父はお仕事で忙しいから無駄話をしたら悪いし――』
――幽霊に「仕事で忙しい」なんてあるのか。
『ハンナもリリーも、今みたいな話をすると、わたしが本気で悲しんでいると勘違いして暴走するきらいがあるんだもの』
「あ……想像がつくかも……じゃあ、わざわざお城の人たちに云うほどのことではないな、と思うことは、これからは私に少し教えて」
彼女の人見知りがどの程度か判らないから、手探りで言葉を選んでいる。
『ええ、ありがとう。明日も来てくれるかしら、この時間に』
ない目を輝かせてソフィアにそう尋ねられ、私はうんうんと何度も頷いていた。
この日の面会はこれで終わった。まったくソフィアの変わりようといったら、初日の様子が幻だったのではないかと思わされる。残りの三週間は、想像していた以上に刺激の多い日々になるに違いない。

## 五．百年契約

ソフィアの部屋に呼ばれるようになって、十日ほどが過ぎた。……いや、確実に十日だ。あの日の日付は相変わらず不明だが、客室の紙と羽根ペンを拝借して、訪問の度に、何度目なのかと話した内容を記録しているからそれは判る。――初めからこうしておけばよかった。彼女の話題は本当にとりとめもないものから、一度も話せずに逝ってしまった母親への想いまで、色々あった。

今日も午後三時きっかりに、彼女の待つ部屋へ向かう。
「失礼します、エミリーです」
『はあい』
ここ二、三日の彼女は走ってきて扉を開けてくれる。私なら「淑女（レディ）らしくない」と叱らないから、だそうだ。
「今日はリリーさんとクッキーを焼いてみたの。よかったら……あ、貴族のお嬢さまは毒見が必要なんだっけ」
そう、あの私を避けに避けていたリリーさんが、だ！　お菓子作りとソフィアが大好きで仕方ないようで、ソフィアにあげたいから作り方を教えてほしいと云ったら快諾してくれた。この情報をくれたハンナさんには感謝してもしきれない。
『いいえ、もう死んでいるもの。このままいただくわ。ありがとう』
それもそうだ。
『ねえ、エミリー』
「うん」
『わたしたち、百年前の十日後に全員殺されたのだけれど――』
やはり、そうか。今屋敷にいる人たちだけが幽霊になっていることに不審を覚えなかったと云えば嘘になる。同じようなときに同じような死に方をしているのでなければ、伯爵の奥方が……この子の母親だけが普通に亡くなっていることが不自然ではないか。そういう家系なら先祖代々皆生ける屍（文字通り！）になっているべきだろう。
「うん」
『驚かないの』

「驚いたって、話を遮ったら失礼でしょう」
『それもそうね。それでね、百年経ったら全員で生き返れる、特別な契約があるの。母が特殊な家系の出(魔女の末裔)だったおかげよ。それがあと十日で、そうしたら母にも会えるわ』
「お母さまに？」
『そう。ずっと直接おしゃべりしてみたかったの。楽しみだわ』
　では伯爵夫人の骸骨がいないのはなぜ？　と云おうとして、私の口から出たのは別の疑問だった。
「私がこのお城に招かれたこととも関係が」
『ええ、わたしが悪霊にならないように。具体的には、殺生をしないように』
「殺生」
『生前であっても死後であっても、人を殺したら生き返れないわ。そういう契約だもの。わたしたちが、わたしたちを殺した人たちに復讐しないためのものよ……それさえなければわたしが殺ってきたのに』
　――お姫さまには物騒な台詞だ。
「ずっと、復讐したかった？」
『当たり前じゃない』
「そうよね。私もソフィアの立場ならそうした、おそらく」
『……ふっ』
　骸骨は小さく微笑(わら)った。
『もうそろそろ時間になるわ。今日もありがとう』
　いつものような唐突さで、この日の訪問も終わった。

六．迫る別れの日

『あと五日ね』
　もはやここでの習慣になりつつある三時のお茶の最中、ソフィアが自分の両手に視線を落として呟いた。
「ん？」
　何のことか判らなかったわけではない。ただ、この生活の終わりが迫っていることを認めたくなかっただけだ。
『皆が生き返るまで。もしくは、あなたとお別れするまで』
　この日は午前中からソフィアの体調が思わしくなかったので（幽霊でも風邪は引くようだ）ハンナさんもリリーさんも部屋から離れず付き添っていた。四人の間に沈黙が落ちる。
『だから、ね。もし、よかったら、これを持っていてほしいの』
　彼女は私の右手を手に取ると、トルコ石の嵌め込まれた白金(プラチナ)の指輪を薬指に滑らせた。私の指には大きすぎて、石が重力に従って指の腹側に回ってしまう。
「そんな、受け取れないわ、こんな貴重なもの」
　云いながら視線を左に移動させたが、リリーさんは深く頷くばかりである。
『それは母がわたしを産むときに父に託したの。いつかわたしに受け継がせるため、わたしがまた、大切な人に渡せるように』
「尚のことだめじゃない！　いつかソフィアに夫や子どもができたら？

私なんかよりもっとずっと大切な人が」
『そのときはそのときよ。今は母に云われている気がするから。エミリーを信じなさい、と』
「……」
『母は子ども好きな人だったのですって』
突然、ソフィアは天井を見上げてぽつりと云った。
『孤児院から連れてきた二人の女の子に文字を教え、貴族とは思えないほど手塩に掛けて育てて、伯爵家のメイドとして大きくなってからもずっと家に置いて。アルのことも実の息子のように可愛がって、わたしだけが』
ソフィアはそこで言葉を切って、
『わたしだけが一度も言葉を交わせないまま。とんでもない皮肉でしょう』
私は返す言葉が見つからなかった。
『お嬢さま！　奥さまは、お腹の中にいらっしゃるお嬢さまのことをそれは愛しておいででした。わたくしども三人の幼少期など、比べものにならないほど』
リリーさんの声が部屋の中に響いた。大好きだというお菓子作りのときでさえ起伏に乏しく、か細かった声が、激しい抑揚を持っている。
『……そう、なの？』
『お嬢さまはエミリーさまがいらっしゃるまで奥さまのお話をほとんどなさらなかったので、思い詰めていらっしゃることに気づけませんでした。お許しください』
慣れない大きな声を出すだけでいっぱいいっぱいになっている骸骨メイドの両手を握ったソフィアは、
『許すも何も、わたしが黙っていたのだから。……でも、そうね、怖かったのかもしれない』
「怖かった」
ひとまず相槌を打っておく。
『母に嫌われていたらどうしようと、この一年はそればかり考えていたわ。わたしを産まなければ命を落とさずに済んだ、なんて云われたら？そんな可能性もあるのに生き返る意味はあるのか、と』
「ねえソフィア」
何を云おうか迷う心とは裏腹に、言葉はするりと口から出ていった。
『ソフィア自身が話してくれたじゃない、伯爵夫人は子どもが好きな人だったって。ハンナさん、リリーさん、それにアルさんとの話も。我が子がそれ以上に愛しくないはずがない。……と、少なくとも私は、そう思った』
『そうよね、それでも無性に不安が湧いてくるときがあって。年々酷くなっていったから、見かねた父がエミリーを連れてきてくれて……本当によかったわ、ありがとう』
「うん。しかもこの指輪、いつかソフィアの手に渡るように、って伯爵にプレゼントしたものなんでしょう」
『そうね。――本当にわたしは愚かだわ。契約の百年が近づいてくるにつれ、それすらも父がわたしを安心させるために吐いた優しい嘘だったらどうしよう、と少しずつ疑心暗鬼になっていってしまったのね』

そのとき、私の正面に座る骸骨の奥に、ブロンドの少女の顔が見え、瞬く間に消えてしまった。在りし日のソフィアの姿、なのだろうか。彼女の後ろに控えるメイド二人には見えていなかったのか、眉一つ動かさずにじっと立っている。

『初めは反発してしまってごめんなさい。あのときはもう発狂しそうだった。母に早く会いたい気持ちと恐怖のせめぎあいで息が詰まりそうだったわ』

人見知りで、部屋に籠もりきりで、貴族の娘らしい気位の高さを備えている、出会った当初に感じた冷たい印象は見る影もない。

『ありがとう。本当に、エミリーはわたしの救世主だわ』

「救世主だなんて、そんな……」

今ではすっかり妹のように思っている彼女の変わりように目頭が熱くなる。

――コンコン。

『お取り込み中かね』

遠慮がちなノックの後に、優しさと威厳が同居した男性の声が届く。先に動いたのはハンナさんだった。

『少々お待ちくださいませ』

と高らかに云いながら扉へと向かい、館の主を招き入れる。

『やあソフィア、もうすっかり元気そうだね』

『お父さま！　ええ、もうどこも何ともありませんわ』

思えばこの父娘（おやこ）が一緒にいるところに直接立ち会うのは初めてだ。二人が話し始めたので退散しようかと思って席を立ったが、ハンナさんに手で止められてしまった。

しばらく談笑が続いて伯爵が立ち去ると、ソフィアは椅子の背凭（せもた）れに頭を預けて長い長い息を吐いた。

『百年間、毎日これよ！　わたしはいつでも明るくなくてはいけない。息子も妻も失った哀れなグレンヴィル伯爵の正気を保てるのはわたしの笑顔だけなのですって』

「ソフィア、」

『見苦しいところをごめんなさい、エミリー。いつもより長くいさせてしまったわね』

「そんな、見苦しいだなんて思ってないわ」

そう返してから、「今日はもう帰ってほしい」という意味なのだと気づき、私は今度こそソフィアの部屋を辞した。あと五日で幕を下ろす、この城での日々に想いを巡らせながら。

## 七．幽霊城のお見送り

最終日の夜になった。玄関ホールには伯爵、執事とその息子、ハンナさん、リリーさんが並んでいる。最後にまだ少し具合の悪そうなソフィアが廊下を心許ない足取りで進んで来て、伯爵の隣に入った。私は六人と向き合い、一人一人と最後の言葉を交わし、お礼を伝え合い、トマさんが開けた玄関扉から一歩踏み出した。と、背後から眩（まばゆ）い光が降ってきて、思わず振り返る。周りの光が強すぎてシルエットしか見えないが、確かに七人の生きた人間の姿がそこにあった。

＊

「エミリー、エミリー？　そんなところで寝ていたら風邪を引くわよ」
母の声がする。私はゆっくりと目を開け、立て続けに四回瞬きをした。祖母の家の、自分が寝泊まりしている部屋だった。夢、か。あの鮮明な記憶は夢だったのか……？
ふと首に冷たい感触を得て、手をやった。ネックレスが巻き付いている。外してみると、なんとあの指輪だった。サイズが合わなかったからチェーンも用意してもらって、ペンダントとして身に着けていた……。
この国では、大切な人にトルコ石のアクセサリーを贈る風習がある。意味は、
『私を忘れないで〈ソフィアの声で〉』

## 短歌

涼風を切って舞い交う赤蜻蛉秋の家路の束の間の夢　阿野二枡

記憶から声も姿も薄れゆく心を録画するカメラどこ　阿野二枡

四年前灰に濁った暗がりで崩れる白をただただ見つめ　ケイ

過ぎ去ればおぼろと消えてゆく君の記憶の端を留める夢を　ケイ

つぶやいた手加減無用合図してテスト開始の鐘が鳴り出す　あきつさ

見開いたページの中のメッセージ古い本には誰かの記憶　あきつさ

駅で待つ毎度秋は遅延だが定刻通り咲く彼岸花　銀平糖

まげわっぱ蓋を開けると栗ご飯今年も来ました食欲の秋　銀平糖

**俳句**　**題は「おくりもの」**

封を切り届いた通知桜咲く　あきつさ

冬の朝枕もとみて上がる歓声　あきつさ

年送り素直に祝えぬ受験生　阿野二枡

「安らかに」　心づくしと　盆提灯　ケイ

子供から　感謝の想いと　カーネーション　ケイ

大掃除年明けやろう先送る　銀平糖

霜降りる「気をつけてね」は温かい　銀平糖

オリオンに見送られゆく夜汽車かな　トシ蔵

ずわい蟹「いただきます！」のあと無言　トシ蔵

初日の出泣くに泣けないものもらい　トシ蔵

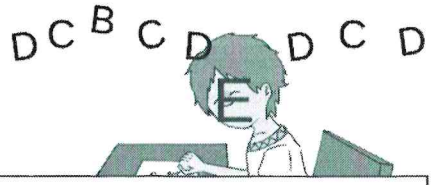
2024年度文芸部予餞会発表作品

# 「受かれメロス」

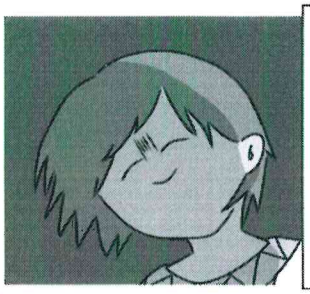
原案：太宰治（「走れメロス」）、翻案：大南怜央、作画：長山穂乃花

8. それから数分のすったもんだの末、メロスは解放された。入試の成績からしたら無謀な挑戦、T大受験へと向けて……

9. ぶらぶら机に向かっていても成績はいっかな安定しない。




10. 判定はD、C、B、C、D、E、D、C、D……と、三角関数のように行ったり来たりするばかりである。

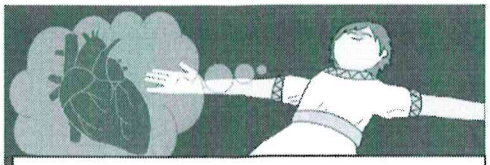


11. そうして迎えた共通テスト、メロスは1日目を終えて今にも死にそうだった。身体疲労すれば、精神も共にやられる。

12. もう、どうでもいいという、勇者に不似合いな不貞腐れた根性が、心の隅に巣喰った。

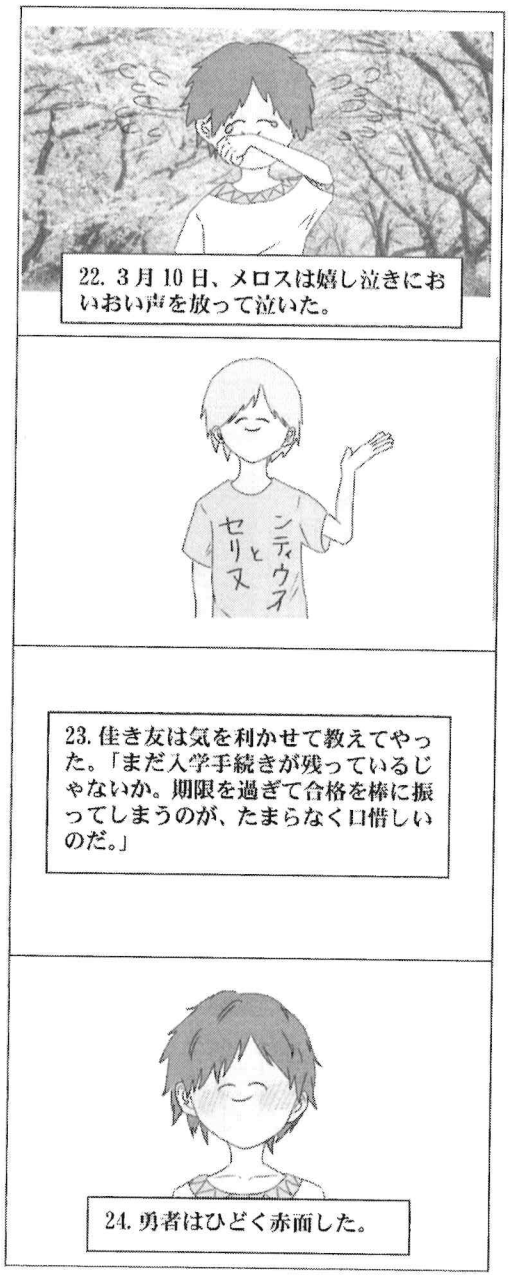
13. 私は、これほど努力したのだ。約束を破る心は、みじんも無かった。神も照覧、私は精一ぱいに努めて来たのだ。

14. 動けなくなるまで走って来たのだ。私は不信の徒では無い。



15. ああ、できる事なら私の胸を截ち割って、真紅の心臓をお目に掛けたい。努力と信実の血液だけで動いているこの心臓を見せてやりたい。

16. けれども私は、この大事な時に、精も根も尽きたのだ。やんぬる哉。――四肢を投げ出して、うとうと、まどろんでしまった。
17. ふと目に、解答速報のページが入った。そっと頭をもたげ、息を呑んでクリックした。自己採点をする。――あれほど禁じられていたのに！
自己採点
18. ほうと長い溜息が出て、夢から覚めたような気がした。歩ける。行こう。上振れの自己採点結果と共に、わずかながら希望が生れた。義務遂行の希望である。
自己採点
19. 2日目を終え、震える手で出願を済ませた。
出願書類とか
20. さらに待つこと3週間、足切り突破の報せが届いた。赤本は解いたが最低点には遠く及ばず、
しかし受験会場への切符だけは少なくとも手にした瞬間である。
21. 2月25日、26日。まだ陽は沈まぬ。最後の死力を尽して、メロスは2次試験に臨んだ。メロスの頭は、からっぽだ。何一つ考えていない。ただ、わけのわからぬ大きな力にひきずられて書いた。時計は刻一刻と進み、まさに最後の1分も尽きようとした時、メロスは疾風の如く残りの1行を書き上げた。間に合った


22. 3月10日、メロスは嬉し泣きにおいおい声を放って泣いた。
ンティウス
と
セリヌ
23. 佳き友は気を利かせて教えてやった。「まだ入学手続きが残っているじゃないか。期限を過ぎて合格を棒に振ってしまうのが、たまらなく口惜しいのだ。」
24. 勇者はひどく赤面した。

# ものがたり

あきつさ

本のある場所というのはどうにも静かで、なんとなく不思議な力が働いているような気がしてくる。そんな中、ペラリ、ペラリと紙をめくる音と、誰かの衣擦れ、足音だけが響く。慣れない人なら息が詰まってしまいそうな空気だが、私は気にせずに目的の場所を探した。

「あ、あった」

思わず小さな声が口から零れ落ちた。慌てて口を押さえたが、特に周りの人がこちらを気にするような素振りはない。

こんな小さな古本屋に、わざわざ「落書き・汚れアリ」のコーナーがあるとは思わなかったが、これでいくらか探しやすくなった、と小さく笑みが浮かぶ。

とりあえず探すための手がかりも目印もないため、左端の棚の左上から順番にとる。パラパラとめくって中身を見る。棚に戻す。

中身を読むわけでもないため、確認は案外早く終わる。一冊につき約三十秒だ。

確認が終わったら、次は右隣の本に移る。しばらくの間、この作業の繰り返しだ。

パラパラ、タンッ。パラパラ、パラ、タンッ。

ページをめくる音と本を棚に置く音だけが鳴り続ける時間が、少しの間続いた。

ペラリ、とページをめくる手が止まる。手に取った可愛らしい表紙の少女小説のいちばんはじめのページに、鉛筆で書かれた薄い文字が見えたのだ。

そこには『これ』と、丸っこい、可愛らしい文字で書かれていた。その本は端に避けておいて、さらに次の本を手に取る。

「これか……」

小さな本屋の、小さなコーナーの一角なので、置いてあった本の数はそこまで多くなく、コーナーの本はすぐに確認し終わった。

「これか……」

見つけた落書きのある本は、随分とキラキラした可愛らしい少女小説一冊だけだった。この本を、自分の趣味でもないのに一冊だけ持ってレジに向かうのはなかなかにハードルが高い。

あの人も、わざわざこの本に書き込まなくてもいいじゃないか、と本人からとばっちりだと言われそうな気持ちが湧いてくる。

よし、と自分を鼓舞してレジに向かう。「汚れあり」の本だからと、定価よりかなり値引いてもらった。

私のアパートの部屋には、本棚とビーズクッションだけが置いてある部屋がある。その部屋でもちもちのビーズクッションに倒れ込みながら今日買った本を開く。

一ページ目は『これ』としか書いていないが、ページをめくると結構な量の書き込みがある。ころころと丸くて可愛らしい文字は、おっとりとした可愛らしい書き手を連想させるが、この文字を書いているのはかなり逞しくて振り切れた面白い女性であることを、私は知っている。

今までの交流の中で、彼女が恋愛小説、それもかなりベタな少女漫画みたいな展開のものを好んでいるような様子はなかったのだけど。なんだか彼女の意外な一面を見たような気がしていたたまれない。

少し前から、私の趣味は古本屋の「落書きあり」のコーナーを巡ることだ。と言っても、落書きのある本ならなんでもいいわけではない。この、ころこ

ろした丸っこい文字、私の大学時代の後輩の落書きが残っている本を探している。

ごろん、と身体を転がしてビーズクッションの上で仰向けになる。真っ白な蛍光灯の光が目に眩しかった。

小説のところどころに、人物の性格や状況による発言の真意の考察など、作者だってそこまで考えていないだろうと言いたくなるほど細かく深読みされたメモ書きが残っている。

「、ふふ、これ、中学生向けくらいでしょ、絶対、ふふ、そんな過去設定ないって、」

考察以外にも、読んでるときに聞いたであろうニュースのメモや、買い物メモなんかも書いてある。

この本の元の持ち主、落書きの主は、私が大学生の時、一つ下の学年の後輩だった灯織さんだ。灯織さんは私より八歳年上で、会社を辞めて大学に入ってきたらしい。

確か、がりがりと一心不乱に講義を聞いてはメモをとっていた様子に興味を惹かれて私から話しかけたのが交流のきっかけだったはずだ。

つやつやしている黒髪を高い位置でくくって、その髪を左右に揺らしながら歩く姿勢がとても綺麗で、なんとなく話してみたいと思っていた。

『ねえ、いつも講義のとき、すごくメモ取ってるよね。どうして？』

『あー、……前の会社がブラックだったの。思い出したくないから、ぜって－正反対の分野に進んでやろうと思って』

そのときに、なんて返事をしたのかはもう覚えていないけど、面白い人だと思ったのは覚えている。行動力と決断力の塊みたいな人だった。

ニュースのメモ書きと思われる文章の中から、わかりやすいキーワードを選んでスマホで検索を掛ける。

検索結果を見るに、二、三年ほど前の出来事のようだった。

「んー？　まあ元気そうでは、……ある？」

灯織さんが大学を卒業した頃、彼女と連絡が取れなくなった。

灯織さんよりも一年早く卒業した私は順当に就職した。ただ就職先が問題で、いわゆるブラック、というものに近かったと思う。今は部署を移動していくらかマシになったけれど、当時は灯織さんと連絡を取る余裕もなかったし、会う時間もなかった。

そのうちに連絡を取ろうとしても連絡先が変わったのか、電話もメールも繋がらなくなってしまった。

ビーズクッションから身体を起こす。それなりに長い時間、寝転がっていたせいで身体が重だるい。頭の方に上っていた血が、ざらざらと落ちていく感覚がする。

本が二冊しか入っていないスカスカしている本棚に、今日買った本を入れる。この本棚は灯織さんの書き込みがある本だけが置いてある。

今日買った本の他の二冊のうち、一冊を手に取った。この本は、灯織さんも私も大学生だったときに古本屋で見つけたものだ。

『わ、この本すごく書き込んである……』

『ん、あれ、先輩。その本は古本？』

『そうだよ。△△書店って名前の、大学の南にある古本屋で買ったの』

『ちょっと見せて。……ああ、やっぱり。これ私が先週売った本だ』

そのときの、本に所狭しと書かれた丸くて可愛い文字が、どちらかといえばガハハハと笑えるタイプの豪快な後輩の姿と結びつかなくて、じっ、と目の前の彼女の姿を見つめた。

『こんな短いスパンで自分が売った本が近くに戻ってくることってある？』

豪快な性格で、ガサツに見える彼女が、存外柔らかな手つきで本を持ち上

げながら笑みの混ざった声で呟いた。だから、私も、同じくらい笑みの混じった声で返した。

『今起こったでしょ』

自分よりも経験豊富で年上の後輩の存在は、いつだって心の支えにする事ができる。

仕事に殺されるのではとさえ思った社会人一年目でも、「でも灯織さんは会社辞めて大学に入り直してたしな……」と思うと、職場環境の改善のための労力くらい大したことがないように思えてきた。

「そう考えると、灯織さまさまだよね」

本の縁は、少しだけ日に焼けて黄色く変色している。それでも、本の中のインクはまったく掠れていない。本を開けば、いつだって鮮やかなままそこにある。

本棚だけのこの部屋は、私の大きな宝箱だ。

宝箱には宝物が、こぼれ落ちるくらいに入っていなちゃいけない。そんな自分のこだわりによって、どの本棚もお気に入りの本だけが隙間なく並べられている。そんな中で、三冊しか本の入っていないスカスカの本棚は、明らかに場違いだった。

「今日こそ灯織さんに会えるかな……？」

小さく呟いた声は、本棚の間に吸い込まれていった。

今日も古本屋に行くために外に出る。外はもう随分と暖かくて、少し暑いくらいだ。帽子でも被ってくればよかったかもしれない。

勢いのまま外に出てみたものの、さて、どこの古本屋に行こうか、と立ち止まってしまった。このあたりは本屋や古本屋が多い。この本の多さが、ここでアパートを借りようと思ったときの決め手になったくらいだ。

どうせなら行ったことのない古本屋にしようと、徒歩で行くには少し遠い、大きめの古本屋に足を向けた。

広い店内は明るく、たくさんの人の活気があって、本がたくさんある場所にしては珍しく少しだけ騒がしい。ざわざわとした空気をかき混ぜるように、ポップな店内BGMが流れている。本棚と本棚の間に点々といる立ち読みしている人たちを避けながら店中を歩き回ってみても、落書きのある本だけのコーナーが見つからない。

見逃したのだろうかともう一周してみるが、結果は変わらない。

「すみません、」

店員さんに聞いたほうが早いだろうとレジ付近まで行くも、どの店員さんも忙しそうに動いていて、なんとなく声を掛けるのがためらわれる。

手の空いた店員さんが見つかるまで少し時間を潰そうと、レジがよく見える位置の本棚から一冊だけ適当に手に取った。

目の前の棚は料理本のコーナーだったようで、手に取った本は離乳食のレシピ集だった。違う本に取り替えようかとも思ったが、他に読みたい本があるわけでもないのでパラパラとページをめくってみた。家庭科の教科書で見たような内容がところどころに見られて、なんとなく懐かしい気持ちになる。

ふと、あるページで目が止まった。あるレシピの横に、小さく見覚えのある文字が書き込まれている。

『これはよく食べる！！』

『これは嫌いみたい』

『冷ますのを忘れずに！』

灯織さんの文字だった。私がこの文字を見間違えるはずがないと思いながらも、つい本のタイトルを確認してしまう。離乳食のレシピだった。

他にも灯織さんの本がないかと他のレシピ本を手にとって見るが、なかなか見つからない。レシピ集は物によって大きさが様々な上、普段手に取っている本とサイズ感が違うため、ページをめくる手がおぼつかない。

「すみませーん、本の買い取りをお願いしたいんですけど」

「おかーさん、ひぃくん、えほんのとこいきたい」

「んー、ちょっと待ってね、あとで一緒に行こう」

レジカウンターのすぐ隣、買い取りカウンターから、ずいぶんと耳慣れた声が聞こえて視線が向いた。

あ、と。どちらともなく声を発した。視線の先にいたのは、ずっと探していた人。

「灯織さん……？」

「あれ、詩織センパイ？」

灯織さんは自分の足元にいる、三歳か四歳くらいに見える男の子を抱き上げて、こちらに歩いてくる。買い取りカウンターに取り残された店員さんが困った顔でこちらを見ているが、灯織さんはお構いなしだ。

「わぁ。詩織先輩、全然変わらないね！」

「……灯織さんはすごく変わったねぇ。こっちは、息子さん？」

「ん、そう。ひかる。ほら、挨拶してごらん」

灯織さんはそう言って男の子の頬をつつく。男の子は人見知りする質なのか、もじもじと恥ずかしそうにしながら小さい声でひかるです、と呟いた。灯織さんは、よくできました、と男の子の頭を撫でると、こちらに向き直った。

「先輩、このあとって時間ある？　久しぶりに会えたし、いろいろ話したいな」

「え、あるよ。あるけど、あっちはあのままで良いの？」

「え？」

私が指を指した方向には、客が途中でいなくなって途方に暮れた顔で虚空を眺めている店員さんがいた。

「バイトの子みたいだから、困らせないであげてね」

「じゃあちょっと行ってくるわ。待ってて」

そう言って背を向けて歩き出した彼女の後ろ姿は、大学時代から変わっていない。唯一の違いと言ったら彼女の肩越しにひかる君と目が合うことくらいだろう。

つやつやして真っ黒な瞳が、好奇心に満ちた目でこちらを見つめていた。

# 彗星

銀平糖

金木犀が甘く香る季節、放課後の西日が照らす教室に二人の影があった。
「近いうちに彗星が見られるらしいよ」
眼鏡をかけたマッシュルームヘアの男の子、聡が言った。
「ウォータースター？」
ツンツンした髪のやんちゃそうな男の子、祐樹がスマホをいじっていた手を止め、振り返って返事をした。
「グフッ。違う違う。難しい漢字の方の彗星。あと、水星は英語でＭｅｒｃｕｒｙな」
思わず噴き出した後、少し得意げに聡が言う。
「おー。さっすがサトちゃん、発音良い」
慣れたお世辞、といった感じであった。
「ふふん」
聡も慣れた返事、といった感じであった。
「で、何の話だっけ？」
「俺の英語力が素晴らしいって話」
「いやいや違うだろ。彗星だよ。彗星」
すかさず祐樹がツッコんだ。
「そう、彗星観察しようと思って。俺らが住んでいる、この町はいい意味で言って自然豊か。悪い意味で言って？」
「チョー田舎」
息がぴったりな会話であった。
「そんなわけで、天体観測にはぴったりなんだ」
「うん、まぁ確かに？　でも、どうやって観察するんだ？」
「えーっと、あぁ肉眼では見るのが難しいらしい」
聡がスマホで調べながら言った。
「えっ、じゃあ見られないじゃん……」
祐樹が少し残念そうに言った。
「あっ双眼鏡を使うと綺麗に見られるっぽい。ゆーきって双眼鏡持ってる？」
「持ってるはずないだろ。俺が天体観測を趣味にしているように見えたなら、サトちゃんは眼科に行った方がいい」
結構真剣に祐樹が言った。
「うん、大丈夫。初めから期待していない。どうしよっかなー。うーん、俺ん家にもどうせないだろうし……。あっ天文部に借りられないかな？」
聡がふと思いついて言う。
パチンッ
「ナイスアイディア。今から借り行こうぜ。今日活動しているといいな」
祐樹が指を鳴らして言った。
二人は教室を出て、天文部が活動している三階の一番西の教室に向かった。
教室の扉には手書きで雑に「天文部」と書かれた紙が貼ってある。
「俺、天文部に知り合い居ないなんだけど」
聡が言った。
「ミートゥー」
祐樹にも知り合いはいないという。

「はぁー、怖い人じゃありませんように」
聡が祈りながら、恐る恐るドアに手をかける。
ガラガラ
「失礼しますー」
遠慮気味に、あと少しで消え入りそうなくらいの大きさの声で聡が言い、ドアを開けた。
中には三人の人がいた。その三人の目線が一斉に聡と祐樹の方に向いた。
『……』
二人の目線と天文部部員の目線が合い、数秒の沈黙が流れる。
「あのー、彗星観察をしたいなって思っ」
ガタッ
一人の女子天文部員が短いポニーテールを揺らして立ち上がり、二人に向かって歩いてくる。そして、聡と祐樹の手を取り言った。
「あなたたち、天文興味あるの？」
彼女の目はキラキラと輝いている。
「え、あー、うん？」
彼女の勢いに気圧されて、思わず二人は「うん」と返事をした。
「やったー！　新入部員よ！」
バッと後ろをふり向き、彼女は残りの二人の部員に向けて言った。
「まだなんとも言ってないでしょ。強要しちゃだめだよ、カレン。ごめんね、二人とも」
落ち着いた声でそう言ったのは、腰ほどまで伸びたまっすぐな髪が特徴の、おっとりとした見た目の女の子だ。
「うん、僕もそう思うよ。強要は良くない」
前髪が目にかかる程のびた男子生徒が言った。身長は男子高校生にしては低めで一五〇ｃｍくらいである。
「もー部長もソラもそう綺麗ごと言って。最低人数いない部活なんだから、こういう機会に新入部員集めないと、潰されますよ、この部活」
「潰されるなんてそんな風に言わない。もっと優しい言葉でね」
カレンと呼ばれる女子部員と男子部員が会話しているのを呆気にとられた様子で聡と祐樹は眺めている。
「あー、ごめんね。いつもこんな調子だから。自己紹介もまだだったよね。私の名前は音羽（おとは）。二年だよ。一応この部の部長やってます」
髪が長い女子部員が言った。
「あ、俺は聡（さとる）で一年です」
「俺は祐樹（ゆうき）です。同じく一年っす」
二人が続けて簡単な自己紹介をする。
「サトル君とユウキ君ね。何か用事があって来たんでしょう？」
音羽がたずねた。
「はい、ニュースで今、彗星が見られる、って知ったので彗星観察したいなと思ったんですけど。観察の仕方とかを調べていたら、観察のためには双眼鏡が必要らしくて。そこで双眼鏡を借りたいんですけど、貸せる双眼鏡とかって天文部にあったりしますか？」
聡が事情を説明する。
「そういうことだったの。双眼鏡はちろんあるわ。でも、そうね…私たちにも今週末、彗星観察をする予定があるんだけど、もしよかったら一緒に観察しない？」
「え、あー、じゃあ一緒によろしくお願いいたします」
思わぬ誘いに少し驚きつつも、聡はＹＥＳと答える。
「ユウキ君もいいのかな？」

「はい、全然オーケーです」
そう答えた祐樹の顔は、少し赤く、心なしかどこか嬉しそうだ。
「じゃあ決まりね。二人とも騒いでないでちょっといい？」
音羽が会話がヒートアップしつつあった二人の部員に言った。
「なんですか部長？」
「今週末、部活で彗星観察する予定があったでしょう？で、この二人も彗星観察をしたいらしいの。だから一緒に観察することになったんだけど、問題はないよね？」
「え、それってつまり仮入部ってことですか？　大歓迎ですよ！」
女子部員が笑顔で答える。
「僕もいいですよ」
もう一人は落ち着いて答えた。
「じゃあ、決まりね。私はさっきしたけど、カレンとソラは今、自己紹介しちゃえば？」
音羽が言った。
「そうですね。私は一年の華怜（カレン）。好きなお菓子は、グミ。よろしくね！」
華怜が自己紹介をする。聡が机の上を改めて見ると、確かにグミの袋がいくつか置いてある。
「僕は蒼空（そら）。一年で、副部長です。まあ部員三人しかいないけど。よろしくお願いします」
少し聡と祐樹を見上げる形になりながら蒼空が言った。
「俺は聡。同じく一年」
「俺も一年で祐樹。よろしくな」
四人が互いに自己紹介を終えたところで、音羽がふと気が付いて言った。
「考えたら、二年なの私だけなんだねー。ちょっと寂しいかも」
「この時期に入る二年の先輩は少ないですからね」と音羽を少し慰めるように蒼空が言う。
「まぁいっか。それじゃさっそくだけど、今週末の彗星観察の話をしていくね。日にちは、明後日の土曜日。場所はこの校舎の屋上で、時間は、」
「え！　屋上って行っていいんですか？」
驚いた祐樹は音羽の説明を遮ってたずねた。
「天文部は特別許可をもらっているからね。入部すればいつでも屋上に入れるよ」
さっきの華怜の話を気にしているのか、少し入部を促している感じに音羽は言った。
「部長、今、グループライン作ったんで、そこに詳しいことはのせておきますね」
スマホをいじっていた華怜が言った。
「もう作ったの。やっぱりカレンは手慣れているね。ありがと」
感心して音羽が言う。
「ふふん、もう部長とソラはグループに入れておきましたから。ユウキとサトルもライン教えてもらえる？」
初対面であるのに、華怜は二人を呼び捨てで呼ぶ。
「わかった」
聡と祐樹と華怜がラインを交換する。
その後、聡と祐樹たちは天文部員の三人と少し話をし、三人はまだ部活をするというので、先に帰宅することにした。
帰り際、聡が祐樹に聞いた。
「なんかさっきまでユーキ顔赤かったけど、なんかあった？」
「マジ？　無意識だわ。恥ずかしー」

「で、何、誰か、カレンかオトハさんかに一目ぼれでもしたわけ？」
冗談めかして聡が言った。
「べ、べつに」
「ふーん」
急に早歩きになった祐樹を聡は駆け足で追いかけていく。空気は少し冷たく、空には宵の明星が出ていた。

土曜日になり、約束の時間の一五分前に聡は生徒玄関前に着いた。そこにはすでに蒼空が空を眺めながら立っていた。
「ソラ君早いね。空を眺めていたみたいだけど何か見つけたの？」
「特別なにかは見つけてない。でもラッキーだなって思って。今日は絶好の天体観測日和だ。晴れているし、そこまで寒くもない。僕、寒いの苦手だからさ」
嬉しそうにニコニコしながら言った。
「そっか。それは嬉しい。初めての天文観察だから、何も見えなかったらさすがに残念だよ」
「そうだよね。ところでさ。サトル君たちは天文部に入るつもりはないの？」
特にグイグイは勧誘しない、やんわりとした感じで聞いた。
「あーまだ決めてないや」
「そっか。もともと部員三人だけだけど、やっぱり僕、男子一人は寂しいんだ。どっちかひとりでもいいから、入部してくれると嬉しいな」
独り言を言うかのように蒼空が言う。そうこうしているうちに音羽と華怜が来た。
「二人とも早いね。今ちょうど五分前だよ」
音羽が明るい声で言った。

「今日の彗星観察楽しみだね」
四人で話をしつつ祐樹を待つ。五時を少し過ぎて祐樹が走ってやって来た。
「遅れてすみません！」
少し息切れながら祐樹が言った。
「大丈夫、大丈夫まだ三分しか過ぎてないから。じゃあ全員そろったし、移動しよっか」
五人は校舎内に入り、階段を上っていく。
「ワクワクするね」
「綺麗に見えるといいね」
一階、二階、三階そして、階段を塞ぐ赤いコーンをどかして、屋上へと続く階段も上っていく。

ガチャ
音羽が屋上のドアを開けると、フワッと少し冷たく澄んだ空気が頬をなでた。外に出ると、少し苔の生えたコンクリートが広がっていた。
「わー、思ったより広いんですね」
祐樹が音羽に言った。広さは二五mプールぐらいある。
「そうなのよ。私たち以外ほぼ人来ないから、管理はされていないんだけどね」
「ここらへんでいいですかー」
小走りして、先を進む華怜が後ろにいる四人に大きめの声で言う。
「いいよー、そこでー」
音羽が口元に手を当てで言った。華怜が手で大きな丸を作って、レジャーシートを広げる。
「みんな荷物置いていいよー」

「グミ♪グミ♪」と言いながら、華怜はさっそく持ってきたいくつかのお菓子の袋を開ける。もちろん、それらは全部グミだ。
「僕はクッキー焼いてきたよ」
そう言い蒼空が取り出すとふわっと甘い香りがする。
「嬉しい。ソラ君料理上手だからね。私はドーナツ持ってきたよ」
音羽は市販の袋入りのドーナツを出した。
「それ、美味しいっすよね。俺はポテチ持ってきました」
祐樹が海苔塩とコンソメの二種類のポテチを取り出しながら言った。
「俺はチョコ」
聡が言う。
「ふふふ。こんなにたくさんのお菓子があると、もうお菓子パーティだね」
みんなでお菓子をつまみつつ、彗星観察の準備をしていく。
「はい、これ双眼鏡。使うときはレンズのカバー外すんだよ」
華怜が祐樹と聡に手渡す。
「サンキュー」
全員に双眼鏡が渡った。
「よし、じゃあ、彗星観察始めよう！」
全員の観察の準備ができたのを見て音羽が言った。各々が双眼鏡を持ち空を見上げる。
「方角ってどっちだっけ？」
「西の低いほうだよ」
「誰か見つかった？」
「まだ見つからないな」
皆がそれぞれ双眼鏡を通して空を見上げ、彗星を探す。空には雲一つない。日は沈んでいるが、地平線付近は群青色と橙色のグラデーションだ。

「あった！」
誰かが声を上げた。ほかの誰かが「見つかった」「あった」と言った。そして、彷徨っていた双眼鏡のレンズの先が全員一方に定まった。
双眼鏡を通して彗星が見える。何かに立ち向かうように、白く光る「コマ」。碧色か白色か、何とも言い難い神秘的な色の「尾」。ぼんやりしているのに、力強い。全員が魅了され、誰も言葉を発しない。
しばらくして、少し心が落ち着き、音羽が言った。
「綺麗だね。みんな見れた？」
『はい』
それから感想を言ったり、お菓子を食べたり、彗星を見たりし、あっという間に時間が過ぎる。

片付けをしながら佑樹が言った。
「俺、天文部入っていいですか？」
「俺も天文部入りたいです」
つられたわけではない。自分の意志で聡も言った。
華怜が白い歯を見せてニコッとし、頷いた。蒼空が顔を綻ばせながら深く頷いた。そして、音羽が手を大きく広げて、心の底から嬉しそうな笑顔をして言った。
「天文部へようこそ」

# 柳のところの幽霊さん

あきつさ

**Q　私は、どうしたら助かりますか？**

じとじとと音を立てて空から水が落ちてくる。私の差した傘もぽつぽつと水滴を跳ね返して音を立てていた。

どんよりとした黒い雲が朝から天を覆いつくしていて、ただでさえ憂鬱な月曜日がもっと嫌になる。

髪はなんだかごわごわするし、制服の黒いスカートの裾には霧のように細かい水滴がついているし。本当に雨の日は嫌い。

……でも、どれも本当の理由じゃない。髪型が決まらないのは嫌だ。服が濡れるのも嫌だ。だけど、本当は。

「、ひッ……」

学校の二階にある二年生用の玄関に入るためには、外付けの階段を上らなければならない。最初の一段に右足をかけたとき。

ガリっと爪が食い込むほどの力で誰かに肩を掴まれた。大きく吸い込んだ空気が喉の奥でか細く震える。掴まれた右肩を見ても、誰の手も、それどころか背後に人の姿もない。

階段の水たまりから運動靴に水が浸み込んでくる。それでも、この場所から動ける気がしなかった。

「、……ぁ……ヒュ、あ……」

呼吸が浅く、速くなる。最近はずっとこうだ。ずっと誰かが近くにいるような気がする。

悲鳴を上げようとした喉は緊張した筋肉に抑え込まれて、自分が吐き出そうとした空気で息が詰まる。

そのまま呼吸が崩れて、ひゥー、ヒュー、と音がおかしくなった。その時首元や口元に、冷たい、生き物の気配のない手の感触が張り付く。

足先だけでなく、傘を握る両手の指先もかじかんできた。

苦しい。息ができない、くるしい。

ひッ、ヒっ、と引きつった呼吸が速くなるたびに、喉元に冷たい大きな手が食い込んでくる。身体の震えが止まらない。雨の降る音が遠のいて、キーン、と耳鳴りがする。

「……諱ゾ繧貞精繧上→縺?干繹√、f縺」縺上j蜷舌＞縺ヲ」

ノイズがかかったような、ざらざらとした声が、耳から直接頭に流れ込んでいるみたいに聞こえてきた。

声、と言っていいのかすら疑問に思うような、神経に刃をひたりとあてられたような緊張感を与える音。ほんの少し力が込められたら、取り返しのつかない致命傷を負ってしまうような、そんな緊張感が。

背後に、誰かがぴったりとくっついて立っているような気配を感じる。耳元でヒュー、ヒュー、と壊れた笛のような吐息が聞こえた。でも、吐息がすぐ近くから聞こえるだけで、その息によって揺らされる空気の動きがまったく感じられない。

「やなぎ〜、あ、いたいた。なんかあった？」

「……すず……」

「教室から見てたけど、なにしてんの？　階段一段目で動かなくなっちゃってさ。あ、もしかしてこないだ階段から落ちたこと思い出してる？」

鈴が声をかけたと同時に、ふわりと背後の気配が消えた。痛いほど掴まれていた肩も解放される。

「すずぅー、もうやだぁー！」

「うわ急にどしたん」

鈴は左手で目元にかかる雨を防ぎながら右手で私の腕を掴んで階段を上らせる。鈴に掴まれたところから熱が移ってきて、ようやく自分が生きていることを思い出したような気分だ。

「すず、私、どうしたら助かるかなぁ……！？」

「何言ってるの、授業始まるから早く！」

**A　何もしないでください。**

俺は柳と呼ばれた少女が友人に手を引かれて階段を上りきったのを見届けて、ホッと安堵のため息を吐いた。

あのままひとりで上っていたら、雨で地面が濡れていることも相まってどこかで足を滑らせて転んでいただろう。

「あんなにドジで怪我もしてるのに、自覚がないもの困りものだよなァ」

俺がそこそこ大きな声でひとりごちても、明らかな不審者である俺を追い出そうとするやつはいない。

なぜなら俺は少し前に死んだ、いわゆる幽霊とかいうやつだからだ。

職場の階段で足を滑らせて落ちて、どうやら打ちどころが悪かったらしくそのまま死んだらしい。

らしい、というのも、俺の記憶は俺が落下する場面を目撃した先輩の叫び声で終わっているからだ。

『ゆうきーーーーーーー！？』

流石に先輩も目の前で後輩が階段をアクション映画さながらに転げ落ちるとは思わなかったようで、先輩のあんな声を聞いたのは後にも先にもこれっきりだ。

幽霊特有の質量のなさを活かして、壁と床をすり抜けて三階まで浮き上がる。死んで得したことといえば移動が楽になったことくらいだ。

気がついたら幽霊になっていた俺が、しばらく街をフラフラ歩き回っていたときのことだ。不意に目に入ったものは階段から転げ落ちかけている少女だった。階段を上ろうとしていたのか、背中から地面に向かっていて、その姿に自分の今際の際がフラッシュバックした。

重さのない身体で少女の背後に一瞬で移動すると、倒れてくる華奢な身体を両手で突き飛ばした。この瞬間、俺は幽霊の身体では物理的な干渉ができないことを完全に忘れていた。

一瞬の後、このまま見知らぬ少女は俺の二の舞いになるのか。そう思ったとき、俺の両手がしっかりと少女の背中を捉えていたことに気付いた。

「え、はッ！？　……ええ？」

のちにいろいろ試してわかったことだが、俺が本気で何かに触ろうとしたり動かそうとしたりしたときは、物理的に干渉できるらしい。ちなみに少女は無事に階段を上りきったあと普通に渡り廊下で転んでいた。

転んだ時の勢いがあまりにも良すぎたので、いくらか心配になって階段に戻ってくるまで待ってみたが、案の定下りの階段でも足がもつれて転がりそうになっている。慌てて肩を引っ張って姿勢を立て直させてみたが、最後の一段から落ちた。

「おい、大丈夫かー？　その道、少し行ったところに穴開いてて危ないぞ。やめとけって」

何にもないような場所で転ぶようなら、でこぼこのアスファルトの道なんて危なすぎるだろうと思って声をかけてみるが、聞こえている様子はない。

「お、やなぎーー！　何してんのーー？」

「今から帰るとこーー！　一緒に帰ろーー！」

先ほどから転んでばかりの少女は、どうやら柳というらしい。柳は遠くか

ら叫んできた少女――おそらく友人――に返事をすると、勢いよく走り始めた。

「あ、おい！！」

「あだっ！！」

柳は身体の右半分を思いっきり電柱にぶつけて一瞬だけ立ち止まった。しかし、すぐに何事もなかったかのように走るのを再開し、今度はアスファルトの凹凸に足をとられて転げた。膝がすりおろされたんじゃないかと思うくらいの転びっぷりだ。

「いたそう」

俺は思わずつぶやいた。幽霊だって痛そうだなって思う気持ちはある。痛そう。

さすがに今度こそ何かしら、「また転んじゃった」とか「膝すりむいた、痛い」くらいのリアクションがあると思ったのだが、やはりと言ったらいいのか、柳は何事もありませんでしたみたいな顔をして友人の方へ歩き出した。さすがに走るのは止めたらしい。どうせ転ぶということを学んだというよりは、もう距離が近くなったから歩いているだけのようにも見えるが。

膝から血がダラダラ垂れ流しているし電柱にぶつけたこめかみはあざというか、もはや赤く内出血している。

こんな光景を見たこの日、俺は決意した。この柳とかいう少女を怪我から守らないと、と。

ちなみに駆け寄られていた友人は慣れているのか、怪我に関して一切何も言わずに絆創膏を渡して一緒に歩いていった。慣れすぎだろ、そこまで慣れる前にドジについて言ってやった方が良かったんじゃねェの、と思ったのは完全に余談だ。

そんなわけで今日まであらゆる方法で柳のドジを防ごうとあれやこれやしてきた。ちなみに防げたことはかなり少ない。

俺は気持ちを切り替えるつもりで――幽霊には必要ないだろうが――両手を上にして大きく身体を伸ばした。そのまま廊下を滑るように滑らかに移動して、柳の教室へと急ぐ。友人が手を繋いでいたから大丈夫だとは思うが、そんなもので柳のドジが治るのならこんなに苦労していない。

柳のドジが心配すぎて長い廊下を滑空していた俺は大切なことを忘れていた。普通の人は幽霊を怖がるものだと。そして俺の行動すべてにホラー演出フィルターがかかっていることにも気付けなかった。

「頼むから何もしないで、大人しくしててくれよ……！」

人生、死んだ後だとしても、そう上手くいかないものである。

# りぶろ・ういるす

トシ田トシ蔵

少女Aは深いため息をもって手にしたタブレット端末をベッドになげだし、自身もそのベッドに大きく身を横たえた。あおむけになっていた少女Aの右の目じりからひと筋の涙が流れた。左目がそれにつづき、涙は滂沱のごとく少女Aの枕を濡らした。やがて少女Aはぐわばっと上半身をおこし、ベッドであぐらをかいた。右手で乱暴に涙をぬぐう。彼女はデジタル版『太宰治全集』をよみおえたところなのである。二箇月を要したその所業の達成感と読破によってもたらされた文学的感銘が精神から肉体へとしずかにひろがりをみせていたのだ。おおきな深呼吸をひとつ。そうだ、こうしちゃいられない。なんとかしなくては。ひとりでもおおくのひとにわたしの、このダザイ体験をしらせねば。少女Aはひとまず親友である少女BにLINEのTV電話をかけ、自身がなしとげたことを滔滔とかたりたおした。少女Aに素直にも感化された親友である少女Bは少女Aの文学的所業を追体験するべく、自身のタブレット端末を手にし、『太宰治全集』をダウンロードしようとした。ところが、である。「あれ？　ダザイ、どこ？」それがコトの発端であった……。その異変はまずインターネットを侵食した。ありとあらゆるデータベースから「ダザイオサム」が消えてしまった。たとえば、青空文庫から。たとえばKindle Storeから。Rakuten Koboだっておなじ。デジタル化された太宰治の「女生徒」だとか「ヴィヨンの妻」だとか「斜陽」だとか「人間失格」だとか（まさに「グッド・バイ」だとか！）をダウンロードしようとしたおおくのひとびとが途方にくれた。それだけではない。個人にしろ研究機関にしろ、すでに手もちのデヴァイスに保存してあったはずの作品までも消えてなくなった。当初はシステムエラーだとおもわれていて、無数のエンジニアが問題を解決しようと躍起になった。ところがこまったことにかれらがあきらかにしたことはどこにも問題がないという問題であった。「ダザイオサム」はなんの痕跡ものこさずにネット上から雲散霧消してしまったのである。……そんなさわぎとは無縁の少年C（高校二年生）があるあさ目ざめたとき、どういうわけか無性に「ダザイ」をよみたくなっていた。それはもう矢も盾もたまらないといった衝動であった。ここで奇妙なのはこの少年Cはうまれてこのかた読書というものにまったくなじんだことがないという事実である。両親も本なんかよまない。じいちゃんばあちゃんもしかりである。だから少年Cの家には本とよべる媒体はいっさつもない。高校二年生ともなれば国語の教科書くらいはよむけれども、読書感想文や新書をよんでレポートを提出するといった学校の課題はいっさいやったことがない。そんな少年Cがである、あさの七時半に目ざめたとたん、がばとおきあがり「もっと『ダザイ』を！」とさけんだのだ。もちろん少年Cは太宰治のなんたるかをしらない。中学二年生のとき、「走れメロス」をよんでいるはずである。高校一年生のときには「富嶽百景」をよんでいるはずである。それなのに太宰治の「だ」の字もしらないとうそぶいてはばからないその少年Cが、である。がばとおきあがったいきおいのままに「だざいだざい」とつぶやきながら制服にきがえ、朝ごはんもたべずに脱兎のごとく家をとびだした。少年Cじたいはなにもかんがえていないのである。「ダザイ」をよまねばというその衝動が少年Cの思考と行動を支配していたのだ。少年Cはシャカリキに自転車をこいでじぶんがかよっている学校にたどりついた。少年Cの足はまっすぐに学校の図書館にむかう。もちろん少年Cは図書館のありかなんてしるはずがない。でもかれはまよわずに最短距離で図書館にたどりついていた。幸か不幸か、その学校の図書館司書Yは毎朝八時に図書館をあける習慣があった。少年Cは図書館のとびらの鍵をあけた司書Y

をつきとばして図書館にかけこんだ。司書Yははからずもトリプルアクセルで尻もちをついた。少年Cは図書館をぬうような小走りで、一番奥の書棚と対峙する。そこには太宰治全集がある。そのことをしっているのはこの学校では司書Yと国語教師たち（G、H、I、J、K、L）だけであった。少年Cはその棚から太宰治全集第一巻をぬきとるとその場にしゃがみこんで念願の「ダザイ」に没頭した。つきとばされた司書Yはイテテテテとたちあがりその少年Cが図書館のおくでなにやら黙黙と本をよんでいるようすをながめ腰をさすりながらかわった生徒もいるもんだくらいにしかおもわなかった。そんなのんきな司書Yはつぎの瞬間おおきな津波にのみこまれた。なにがおこっているのかまったくわからなかった。わからないままに司書Yはむぎゅうと気絶した。「ダザイ」衝動にせきたてられたのは少年Cだけではなかった。その学校の生徒全員が（ここがミソである。生徒全員が、である）ときをおなじくして少年Cとおなじように学校の図書館をめざしていたのである。そのなかで午前八時十分ころ図書館にたどりついた二百人くらいの生徒がせまい図書館に殺到し寿司づめ状態で身うごきがとれなくなっていた。……その現象はまたたく間に全世界にひろまった。ネット上から「ダザイ」が消滅したできごとは「ダザイ熱」蔓延の予兆だったのだ。「ダザイ熱」に浮かされたかれらは一様に「ダザイ」がよみたくなり本を手にとってページをめくる。かれらはただ「ダザイ」をよむだけではなく、「ダザイ」をたべもした。文字どおり「ダザイ」をいちページよむたびにそのページをはぎとってむさぼりたべたのである。かれらはいったん「ダザイ」を食べつくすとおちついた。しかし、どこかに「ダザイ」を嗅ぎとると、どこであれしのびこみうばいとり、ヘタにさからうとみさかいもなく暴徒化することもあった。太宰治の作品を自宅に所有しているものはその熱にうかされなかった（当然である）。……そんなさわぎをひとまずよそに、就寝まえのたのしみとして医師Xはひとり書斎で太宰をよんでいた。妻Wは居間で韓国ドラマをみている。ひとり息子Dはもう眠っている。医師Xが手に取ったのは「津軽」（ちくま文庫『太宰治全集7』）であった。何度目であろうか、十回はくだらないであろうな。医師Xが「津軽」を片手に津軽半島を旅したことは一度や二度ではない。その晩、感慨をあらたにしてページをめくっていた医師Xの耳に妻Wの叫び声、のようなものが聞こえた。叫ひ声をあげようとした口をふさがれて、もれでた「キ」だけの振動の余韻がとどいたのではないかというかすかな音だった。医師Xは文庫本をとじその表紙をじっとみつめ、もしやとおもった。忍び足で書斎をでて階下の居間にむかう。TVから韓国語がきこえてくる。しずかにドアをあける。いきなり首をしめられた。若い男Zであった。若い男Zは「ダザイー」とうめきながら医師Xを突き放し一目散に医師Xの書斎へかけあがった。若い男Zは医師X所蔵の太宰治全集（ちくま文庫）にとびついた。おくればせながら書斎へとびこんだ医師Xはかろうじて若い男Zから太宰治をうばいかえし書棚にもどした。まなじりを決した若い男Zが医師Xに襲いかかってくる。医師Xは軽やかに身がまえて、襲いくる若い男Zのからだをかわし、アチョーと（ひかえめにではあったが）叫びながら若い男Zの顔面に右こぶしをみまい、ふらつく若い男Zの後頭部に左回し蹴りをくらわせた。医師Xは截拳道（ジークンドー）の使い手であったのである。医師Xは書斎の床にのびている若い男Zをひきずってくるまにのせ、自身がかよう大学病院へはしった。ひっそりとした病院の診察室に若い男Zをかつぎこみ、注射器を血管にブツリとさして医師Xは若い男Zの血液を採取した。顕微鏡でその検体をのぞきこんだ医師Xは、そこに未知のウイルスを発見した。その形状はまるで銀座のバア「ルパン」の止まり木ではにかんだ笑顔を浮かべている太宰治のシルエットそのままだった。医師Xはそれを「リブロウイルスダザイ」と名づけて悦

にいった。……世の中はリブロウイルスダザイ感染者であふれかえり、政治も経済も破綻した。政治や経済の中枢をになうひとびとでリブロウイルスダザイに感染しなかったものはなく、リブロウイルスダザイに感染しなかったもののほとんどは政治経済の分野では役立たずだったのだ。感染者には特有の嗅覚があり、太宰治の書籍のありかをかならずかぎあてた。それは書店や図書館だけでなく、個人宅にもおよんだ。「ダザイ熱」感染者との不毛なたたかいに疲れ果てたダザイ愛好家たちは泣くなくじぶんの蔵書をさしだすことにした（そのなかにはくだんの医師Xも含まれていた）。世界中の書籍化された「ダザイ」が路上や広場になげだされることになった。ダザイ熱罹患者はダザイの山に群がってダザイを読破し胃袋におさめていった。こうして、全世界の太宰治作品が蕩尽され、リブロウイルスダザイの感染は終息することとなったのである（それは奇しくも六月十九日であった）。やがて太宰治という「偉大」な小説家の存在は愛読者だったものの記憶からもうすれていった。太宰治という小説家の存在はわすれさられ、そもそもの不在に帰着した。でも。でも、である。しかし、じつはそうなってしまえば、だれひとりとしてこまる者はいなかったのである。ブンガクとは、かくもはかなく哀しいものなのである。

せせらぎ　第188号
2025年1月31日　発行
編集・発行　群馬県立太田女子高等学校文芸部
〒373-8511 群馬県太田市八幡町16-7
群馬県立太田女子高等学校
部員　大南怜央　長山穂乃花
石原真奈美　藤崎沙彩花
顧問　吉田俊宏　早川由子
表紙　Adobe Expressをもちいた AI 画像
印刷・製本　群馬県立太田女子高等学校文芸部

太
女